

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湖沼）水生植物調査

# 伊豆沼・内沼 サイト

—宮城県登米市、栗原市—

伊豆沼は、「伊豆沼・内沼の鳥類およびその生息地」として国の天然記念物に指定されています。灌漑用の堰止湖であり、隣接する内沼と合わせて 3.87 km<sup>2</sup> の水面面積を有する富栄養湖です。伊豆沼は、かつては多様な水生植物が豊富に生育する湖沼でしたが、近年水生植物が激減しており、その保全に関する研究や活動が行われています。



サンショウモ。絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。  
(2015年9月)



湖辺のヨシ帯。株立ち状になり、倒壊しかけている様子が多く見られました。  
(2015年10月)



伊豆沼の景観。湖面に見えるのは、ハスとヒシの群落。  
(2015年9月)

## 2015年度の調査結果概要

湖内全域の水生植物相の把握を目的とした「フロラ調査」を2015年9月11～12日に、湖辺植生の構造の追跡を目的とした「エコトーン調査」を10月6日に行ないました。今年度より新たに加えられたモニタリングサイトであり、今回が初めての調査になるため、フロラ調査・エコトーン調査ともに試行的に多くの調査地点で実施しました。調査地点は、現在でも沈水、浮葉、浮遊植物が確認される場所に設定しました。

両調査合わせて、計22種の水生植物（沈水、浮葉、浮遊、抽水植物）が確認され、なかには環境省第4次レッドリストで、絶滅危惧Ⅱ類のサンショウモ、準絶滅危惧のアサザ・ガガブタ・イヌタヌキモも確認されています。一方、2種は外来種であり、ハゴロモモとアイオオアカウキクサが見られました。後者は南岸に多く分布しており、今後のさらなる拡大が懸念されます。近年の報告のように、浮葉植物に比べて沈水植物はほとんど確認されませんでした。今後の植生回復が期待されます。

**【調査者・調査協力者】**  
藤本泰文（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）、山ノ内崇志（東邦大学理学部生命圏環境科学科）、加藤将（日本国際湿地保全連合）



エコトーン調査における方形枠内の植生記録の様子。  
(2015年10月)



フロラ調査の様子。船上からアンカー型水生植物採集器を用いて、湖内の植物をドレッジします。  
(2015年9月)



アサザ。伊豆沼では、長花柱花型の花序が見られます。  
(2015年9月)



速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湖沼）水生植物調査

# 頸城湖沼群 サイト

—新潟県上越市—

頸城湖沼群は、7つの湖沼が連なる中頸城地方の湖沼群であり、このうち4湖沼（長峰池、坂田池、鶉ノ池、天ヶ池）をモニタリングの対象として選定しています。各湖沼は過去の古砂丘の起伏に起因し、様々な湖岸形状が見られるため、多様な環境が形成されています。様々な水生植物が確認されており、希少種も数多く報告されています。



ササエビモ（絶滅危惧Ⅱ類）。長峰池で多く見られました。



両生植物のタチモ（準絶滅危惧）。沈水形の群落。

## 2015年度の調査結果概要

頸城湖沼群は今年度より新たに加えられたモニタリングサイトです。2015年9月21～23日に実施されました。モニタリング対象の4湖沼（長峰池、坂田池、天ヶ池、鶉ノ池）から、計57種の水生植物（沈水、浮葉、浮遊、抽水植物）が確認されました。クロモヤオオトリゲモを中心とする沈水植物の大群落が見られ、アサザ、ガガブタ、ハスといった浮葉、抽水植物が湖面を覆う様子も見られました。また、絶滅危惧種であるササエビモ、さらに車軸藻類の多くの種が確認されました。湖沼群全体で見ると現在でも豊かな多様性を保っていることが確認されましたが、湖によっては著しく沈水植物が減少している状況も明らかになりました。また、外来性の園芸スイレンが侵入し、分布を拡大している様子も複数の湖沼で見られました。スイレンは繁殖能力が高く、在来種の生育分布範囲への今後の拡大が懸念されます。

### 【調査者・調査協力者】

志賀 隆・平澤 優輝（新潟大学）、國井 秀伸（島根大学）、西廣 淳・山ノ内 志（東邦大学）、高村 典子（国立環境研究所）、横井 謙一・加藤 将（日本国際湿地保全連合）



浅瀬のイトシャジクモ（絶滅危惧Ⅰ類）。



長峰池西岸上空からの景観。広大なハス群落を確認できます。



坂田池でのフロラ調査。  
船上からアンカー型採集器を用いて、水生植物を採集する様子。



外来種のスイレン。長峰池と天ヶ池でパッチ状に生育が確認されました。



長峰池西部では多種多様な抽水、湿生植物が見られました。



速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湖沼）水生植物調査

# 宍道湖 サイト

— 島根県松江市、出雲市 —

宍道湖は日本を代表する大型汽水湖の一つです。中海を通して日本海につながり、海水の10分の1程度塩分濃度となっています。宍道湖では、一度ほとんど失われた水生植物が再び出現し、分布が拡大している現象が近年見られています。かつてアオコが大発生していた湖沼から水生植物が優占して繁茂する湖沼へとレジームシフトが起こった可能性も指摘されており、モニタリングしてゆく価値が高い湖沼であると考えられています。



オオササエビモ群落。宍道湖の優占種です。



採集されたササバモ。

## 2015 年度の調査結果概要

宍道湖は今年度より新たに加えられたモニタリングサイトです。2015年9月2～3日に実施されました。今回が初めての調査になるため、湖内および湖沼付近の河川流入部で、試行的に多くの地点のフロラを調査しました。計24種の水生植物（沈水、浮葉、浮遊、抽水植物）が確認され、特にオオササエビモ、ツツイトモが大群落を為している様子が多くの地点で見られました。シャジクモ、ツツイトモ、リュウノヒゲモ、ミズオオバコ、ミズアオイといった環境省第4次レッドリストの掲載種が確認されました。一方で、宍道湖でこれまでに報告されていた外来種（ハゴロモモ、オオカナダモ、コカナダモ）に加え、アマゾンチカガミの侵入が初めて確認されました。繁殖力が高いことが知られているため、今後のさらなる分布拡大が懸念されます。

### 【調査者・調査協力者】

國井秀伸(島根大学汽水域研究センター)、辻井要介(元ホシザキグリーン財団)、川上 豪(NPO法人自然再生センター)、加藤 将(日本国際湿地保全連合)



浮遊するマツモ。西岸の踏査地点にて。

宍道湖の景観。西岸より。



西岸上空からの景観。  
水生植物の群落が湖パッチ状に確認できます。



シャジクモに混ざって採集されたシジミ。  
宍道湖の主要な漁獲物の一つです。

採集された水生植物を船上で観察し、同定する様子。